

二人の老師

2019年3月5日(火) 天気、晴れ。しかも暖かい。

この日の1時間目は、総合の王師博老師の初日となった。王老師は三十歳前後の女性、小太りで眼鏡の奥に大きな瞳が覗く可愛い先生という印象。声も高音が響く可愛い声の持ち主だった。記憶が定かでないが、既婚者だったと思う。

授業は殆ど黒板を使わなかった。その代わり授業開始の際は天井からスクリーンが降りて来て、PCを使いパワーポイントの映像をプロジェクターで投映させていた。語学の授業では一般的な、声を繰り返し出させて学ばせるスタイルだった。時折鋭い眼差しで学生に緊張感を促し、授業に緩急をつけるのがうまかった。パワポで提示した文章を言わせた後、わざと一部の単語を消して、そこを含んだ文で発声させるなど、ちょっと意地悪だが学生に記憶の曖昧さを自覚させる教え方も印象に残った。

王老師の趣味はイタリア語の習得だった。何年か前、イタリアはミラノにある『孔子学院』※1の中国語講師として、かの地で生活していたようだ。どうりで、休み時間などイタリアからの留学生と談笑していることが多かった。この学院にも、欧米ではフランスについて多くのイタリア人学生が在籍していた。

折しも習近平主席が「一帯一路」の構想を各国に呼びかけ、イタリアがそれに応じようとしていた時だった。イタリア人の中国に対する関心の高まりは当然だった。しかし今、コロナウィルスの影響で遼寧省内の感染者数は140人程(20年4月1日)。湖北省の68000人と比べれば少ないが、大連市にも感染者が十数名いる。イタリアでの感染メッカ、ミラノを含むロンバルディアと縁の深い王老師の周辺に、異変がないことを祈るばかりだ。

一方、担任の劉老師は、名前が候。写真に見るように、顔が大きく癖のない黒髪を後ろにまとめたり、垂らしたりしていた。眼差しはいつも優しく、王老師に比べ、授業でも緊張すること



劉候老師 学期末に贈呈した花束と

はなかった。黒板を多用しオーソドックスな授業を展開していた。教科書付属の音声教材を流し、生徒一人一人にあてて、その一文を言わせたりすることが多かった。

ちょっと心残りだったのは、学期の途中、学院内で班単位で出演する歌謡イベントが予定されていた。そのために、連絡用に使っていた微信(We Chat)を使い曲を選んだり、皆で歌ったりしていたが、何故かこのイベントがされないままになったこと。もう一つ、なかなか課題を消化できない学生がいたらしく、途中でスピードを落としたものの、どうも自分にとっては遅すぎた面もあって、物足りない授業になってしまったこと。しかし、担任として出席がままならない学生が多いこともあり、さぞかし気苦労が多かったのではと思うので、今は何よりもご苦労様と言っておきたい。

劉老師は、独身。この頃、8日に迫る中国の祝日『婦女節』が話題になった時、11月11日の「独身者の日」に話題が飛び、「私は独身女なの」と自虐的に語ったのが、面白かった。面白かったは不謹慎だが、ただ自虐的だけでなく、その語り口に大いにペーソスを感じたことが印象に残ったのだ……。何処の国も、高学歴者は晩婚では？とも思ったりした。

その他、月曜日1回だけだが、陸老師にも教わった。

※1 孔子学院とは、中国政府が各国に設けた政府系の中国語と中国文化の教育機関。日本にもあり例えば、町田市の桜美林大学などに併設されている。